

# 校長室から平成30年12月19日

## いじめ防止「きずな」キャンペーンが終了しても

### 親和的な集団である事の重要性

今年度2回目の全市一斉に実施するいじめ防止「きずな」キャンペーン期間が終了しました。先週ご紹介しましたが、本校では生徒集会や生徒会中心のあいさつ運動、担任との個人面談、アンケート調査等を行いました。この期間は終了しましたが、学校生活は今までと同じように続いています。よりよい生活を送ることができるように、教職員一同で指導・支援していきたいと考えております。保護者の皆様におかれましてもご協力をお願いいたします。

かつて私が経験したエピソードをご紹介いたしますので、生徒の皆さんも保護者の皆様も、「いじめ防止」について考える材料の一つとして読んでみてください。今から数十年前、初任地で、2度目の学級担任をしていた時の事です。私が尊敬している先生が受け持っていたクラスに、ほとんどしゃべることができない女子生徒がいました。休み時間になると、いつも教室の壁側に立っていて、他の生徒の様子をおどおどした表情で見つめていました。授業中も同じで、発表する事や表現する事ができません。しかし、クラスの生徒達はみんなその生徒の個性を知り、尊重していました。休み時間に走り回る男子生徒には、女子生徒達が「〇〇が怪我するから走らないで。」と声をかけ合っていました。その女子生徒の事をいつも気遣っていましたが、しゃべることができない理由は誰一人分かりませんでした。

担任の先生は、とてもユニークな先生で、クラスの生徒に「1日1回はギャグを言ったり、洒落を考えたり、みんなで笑い合おう。」と話していましたが、最初、生徒達はあまり乗り気ではなかったようでした。しかし、いつの間にか帰りの会で「楽しい事を発表する時間」が設定されました。私も、その先生に誘われて、帰りの会を見学に行った事を覚えています。生徒達の表現力も高まり、「この子は、プロの漫才師か」と感心したり、微笑ましく思ったりした事を思い出します。

しかし、その女子生徒は、しゃべることができなかつたので、先生が「いつでも良いから、何か考えたらこのカードに書いてみて。」と用紙を渡していました。そして、なんとその女子生徒がある日、用紙に書いてそっと先生に渡していました。それを女子生徒の許可を得て、先生が帰りの会で発表しました。クラスの生徒達はとても驚き、「すごい。」「おもしろいよ。」「〇〇ちゃん、それ最高!」などと賞賛の拍手が送られたそうです。そして先生が「これは、最優秀賞だな。黒板に貼っておこうか」と言った時、その女子生徒が「う・れ・し・い」とつぶやいたのを近くにいた生徒何人かが聞いていました。残念ながら先生には聞こえなかつたそうですが、一緒に生活していた生徒達が初めて聞いた言葉でした。声を聞いた数名の生徒が、「〇〇、今、しゃべった?」「しゃべったよな。」と大騒ぎになり、涙を流しながら喜んだ女子生徒もいたそうです。その先生にお会いすると、いつもこの話題になります。いつの時代も生徒の力はすごいものです。

親和的な雰囲気、誰もが個性を發揮できるような環境作りを心掛けていたその先生は、退職していますが、3年間同じ職場で働かせていただきました。先生の口癖は「お前には無理だと思うけど、合唱コンクールで俺のクラスに勝ってみろ。」でした。おそらく、「クラスの生徒全員が安心して過ごせるクラスを作りなさい。それができたら、勝てるよ。」というメッセージだったと思います。きっと殺伐とした環境では「いじめ防止」は達成できないでしょう。私たちの長町中学校もそんな学校でありたいですし、古きよき時代の美談で終わらせてはいけなないと、今、深く考えています。